8/18 Sun.

大成建設presents読響サマーフェスティバル2024
《三大交響曲》東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2024 "THE GREATEST SYMPHONIES",
presented by TAISEI CORPORATION / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
出口大地 *–p.5*
DAICHI DEGUCHI

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

シューベルト
SCHUBERT

交響曲 第7番 ロ短調 D759 **〈未完成〉**［約25分］ *–p.10*
Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

ベートーヴェン
BEETHOVEN

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 **〈運命〉**［約31分］ *–p.11*
Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro – IV. Allegro

［休憩］
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

交響曲 第9番 ホ短調 作品95 **〈新世界から〉**
［約40分］ *–p.12*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

大成建設 TAISEI
For a Lively World

8/21 Wed.

大成建設presents読響サマーフェスティバル2024
《三大協奏曲》東京芸術劇場コンサートホール 18時30分開演
YNSO SUMMER FESTIVAL 2024 "THE GREATEST CONCERTOS",
presented by TAISEI CORPORATION / Tokyo Metropolitan Theatre 18:30

指揮
Conductor
大井剛史 *–p.6*
TAKESHI OOI

ヴァイオリン
Violin
中野りな *–p.8*
LINA NAKANO

チェロ
Cello
佐藤桂菜 *–p.8*
KEINA SATOH

ピアノ
Piano
進藤実優 *–p.9*
MIYU SHINDO

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64［約26分］ *–p.14*
Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

チェロ協奏曲 ロ短調 作品104［約40分］ *–p.15*
Cello Concerto in B minor, op. 104
I. Allegro
II. Adagio ma non troppo
III. Allegro moderato

［休憩］
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23［約32分］ *–p.16*
Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
特別協賛：大成建設株式会社
事業提携：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

大成建設 TAISEI
For a Lively World

8/24 Sat.

第269回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 269 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

8/25 Sun.

第269回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 269 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮 Special Guest Conductor	**小林研一郎**（特別客演指揮者）*–p.7* KEN-ICHIRO KOBAYASHI
ピアノ Piano	**エヴァ・ゲヴォルギヤン** *–p.9* EVA GEVORGYAN
コンサートマスター Concertmaster	長原幸太 KOTA NAGAHARA
グリンカ GLINKA	**歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲**［約5分］*–p.17* "Ruslan and Lyudmila" Overture
ラフマニノフ RACHMANINOFF	**ピアノ協奏曲 第2番** ハ短調 作品18［約33分］*–p.18* Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18 I. Moderato II. Adagio sostenuto III. Allegro scherzando
［休憩］ [Intermission]	
ムソルグスキー（ラヴェル編） MUSSORGSKY (arr. RAVEL)	**組曲〈展覧会の絵〉**［約35分］*–p.19* Suite "Pictures at an Exhibition" プロムナード－I. グノームス（こびと）－プロムナード II. 古城－プロムナード III. テュイルリー（遊びの後の子供たちの喧嘩） IV. ビドロ（牛車）－プロムナード V. 殻をつけた雛鳥（ひなどり）のバレエ VI. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ（金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人） VII. リモージュ（市場） VIII. カタコンブ（古代ローマの地下墓地）－死せる言葉による死者への呼びかけ IX. 鶏の足の上の小屋（バーバ・ヤガー＝民話上の妖婆） X. キエフ（キーウ）の大門

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

指揮

出口大地

DAICHI DEGUCHI, Conductor

©hiro.pberg_berlin

クラシック音楽の定番
傑作交響曲を一挙指揮！

2021年にハチャトゥリアン国際コンクールで優勝して注目を浴びる気鋭が、三つの傑作交響曲〈未完成〉〈運命〉〈新世界から〉に、熱い思いを込める。

大阪府豊中市生まれ。幼少よりピアノを、15歳よりホルンを学ぶ。関西学院大学法学部卒業後に、東京音楽大学作曲指揮専攻を卒業。23年には、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学のオーケストラ指揮科修士課程を修了した。指揮を広上淳一、田代俊文、三河正典、下野竜也、C. エーヴァルト、オペラ指揮をH-D. バウム、現代音楽指揮をD. コールマンらに師事。ヤルヴィ・サマーアカデミーやベルリン・ドイツ・オペラの音楽総監督ラニクルズによるマスタークラスなどに参加して研鑽を積むほか、オーケストラ・アンサンブル金沢主催の井上道義による指揮講習会では優秀者に選出された。21年にはクーセヴィツキー国際指揮者コンクールで最高位及びオーケストラ特別賞受賞。

これまでにベルリン・コンツェルトハウス管、アルメニア国立響、カルロヴィ・ヴァリ響、グロッセート市管などを指揮するほか、21年にはベルリン放送響の公演でユロフスキのアシスタントを務めた。国内では、22年に東京フィル定期演奏会での日本デビュー以降、京都市響、東京都響、東京響、日本センチュリー響、大阪フィルをはじめ全国各地のオーケストラにデビューが続いている。現在は、東京およびベルリンを拠点に各地で活動中。読響とは22年以来、2回目の共演。

8/21
三大協奏曲
Maestro

指揮

大井剛史

TAKESHI OOI, Conductor

読響・夏の名曲選
華麗なる《三大協奏曲》

©Ayane Shindo

オペラやバレエ、吹奏楽など幅広い分野でマルチな才能を発揮している次世代を担う俊英が、若き3人のソリストを盛り立てて三つの傑作協奏曲を披露する。

1974年生まれ。17歳より指揮法を松尾葉子に師事。東京芸術大学卒業および大学院修了。若杉弘、岩城宏之の各氏に指導を受ける。スイス、イタリア各地の夏期講習会で、レヴァイン、マズア、ジェルメッティ、カラブチェフスキーらの指導を受ける。2007年から09年までチェコ・フィルで研鑽を積み、08年にアントニオ・ペドロッティ国際指揮者コンクールで第2位に入賞。これまでに仙台フィル副指揮者、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉（現・千葉響）常任指揮者、山形響正指揮者を歴任。東京佼成ウインドオーケストラでは正指揮者を経て、今年4月に常任指揮者に就任した。「常任指揮者就任記念演奏会」では、マスランカの交響曲第2番を指揮し、大きな成功を収めた。今後、5年間にわたるマスランカ・チクルスが予定されている。

これまでに国内主要オーケストラに客演し、多彩なレパートリーと誠実な指揮でいずれも高い評価を得ている。在学中より東京二期会、新国立劇場などのオペラ公演で副指揮者を務めており、近年ではオペラのほかバレエ、ミュージカル、日本舞踊との共演など多くの舞台公演を指揮。東京芸術大学音楽学部器楽科非常勤講師（吹奏楽）。尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。読響とは14年の初共演以降、共演多数。今年12月の愛媛および岩国公演でも共演予定。

8/24
土曜マチネー
8/25
日曜マチネー
Maestro

指揮

小林研一郎
（特別客演指揮者）

KEN-ICHIRO KOBAYASHI, Special Guest Conductor

“炎のマエストロ”が描く
〈展覧会の絵〉

© 読響

“炎のコバケン”の愛称で親しまれる日本を代表する指揮者。84歳を迎え円熟を深める名匠が〈展覧会の絵〉を振り、会場を熱狂へと誘う。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々の楽団のポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」では、東洋人として初めて開幕コンサートに招かれスメタナ〈我が祖国〉全曲をチェコ・フィルと演奏し、絶賛された。ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章（同国で最高位）などを授与された。国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞などを受賞。チェコ、オランダでも文化を通じた国際交流や社会貢献に寄与し、長年にわたり重責を担ってきた。

現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル、名古屋フィルおよび群馬響の桂冠指揮者、九州響名誉客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学、リスト音楽院の名誉教授、ローム ミュージック ファンデーション評議員などを務めている。オクタヴィア・レコードなどから多数のCDをリリース。著書には『指揮者のひとりごと』（日本図書協会選定図書）などがある。

22年10月には、読響創立60周年記念の東北3公演（岩手県盛岡市、宮城県石巻市、福島県いわき市）を成功に導いた。

8/21
三大協奏曲
Artist

©kisekimichiko

ヴァイオリン

中野りな

LINA NAKANO, Violin

2021年日本音楽コンクールで優勝し、22年仙台国際音楽コンクールにおいて、史上最年少の17歳で優勝した実力派。以降、国内主要オーケストラとの共演やリサイタルなど、演奏活動を本格的に開始し、高い評価を得ている。04年東京都生まれ。23年4月より桐朋学園大学「ソリスト・ディプロマ・コース」に全額特待生として在学し、辰巳明子に師事。また、ウィーン市立芸術大学ではカルヴァイ・ダリボルに師事し、研鑽を積んだ。フォンテックよりプーランク、R. シュトラウスのソナタ他を収めたアルバムを23年12月にリリース。ローム ミュージック ファンデーション23年度及び24年度奨学生。使用楽器は1716年製のアントニオ・ストラディバリウス（一般財団法人ITOHより貸与）。読響初登場。

8/21
三大協奏曲
Artist

中学卒業後に渡米し、アメリカで研鑽を積む期待の国際派。2000年生まれ。ジュリアード音楽院卒業後、23年からロサンゼルスのコルバーン音楽院で奨学生として学ぶ。20年に英キングス・ピーク音楽オンラインコンクールで優勝するなど受賞多数。大阪響などと共演するほか、16年にはNHK名古屋ニューイヤーコンサートで名古屋フィルと共演し、NHK総合で放送された。これまでにカーティス音楽院サマーフェスティバル、小澤国際室内楽アカデミー奥志賀、霧島国際音楽祭、ローム ミュージック セミナーなどに参加。小澤征爾、竹澤恭子らと共演するほか、多数のソロ・リサイタルを行う。ヤマハ音楽支援制度奨学生。23年度シャネル・ピグマリオン・デイズ参加アーティストとしてリサイタルと室内楽シリーズに出演。読響初登場。

チェロ

佐藤桂菜

KEINA SATOH, Cello

ピアノ

進藤実優

MIYU SHINDO, Piano

ロシアとドイツで学び、2021年のショパン国際コンクールで話題を呼んだ人気急上昇中の気鋭。02年愛知県大府市生まれ。4歳からピアノを始め、モスクワ音楽院付属中央音楽学校卒業後、現在はドイツのハノーファー音楽演劇メディア大学でアリエ・ヴァルディに師事。ショパン国際コンクール、ジュネーブ国際音楽コンクールのセミファイナリスト。ピティナ・ピアノコンペティション特級ファイナル銀賞及び聴衆賞受賞のほか、浜松国際ピアノアカデミーコンクール第1位および中村紘子賞受賞など受賞歴多数。モスクワ音楽院大ホールで2度演奏し、校内選抜によりCD録音にも参加。2018〜20年度ヤマハ音楽支援制度奨学生、21年および23年度ローム ミュージック ファンデーション奨学生、第53回江副記念リクルート財団奨学生。読響初登場。

8/21
三大協奏曲
Artist

2021年にショパン国際コンクールの最年少ファイナリストとなり、鋭い感性で注目を浴びた新星。04年ロシア生まれ。モスクワ音楽院付属中央音楽学校でN. トゥルルに師事し、キーシン、マツーエフらの支援を受けて研鑽を積む。18年若い音楽家のためのクリーヴランド国際コンクールに優勝、19年ヴァン・クライバーン国際ジュニア・ピアノ・コンクールで第2位など受賞歴多数。これまでダラス響、ワルシャワ・フィル、ルツェルン響、シュトゥットガルト・フィル、マリインスキー劇場管、ボローニャ歌劇場管などと共演。現在はモスクワ音楽院とソフィア王妃高等音楽院に在学中。楽団との共演やリサイタルのほか、室内楽や歌曲などでも活躍。昨年初来日し、好評を博した公演のライヴCDが、今年Altusからリリースされる。読響初登場。

ピアノ

エヴァ・ゲヴォルギヤン

EVA GEVORGYAN, Piano

8/24
土曜マチネー
8/25
日曜マチネー
Artist

シューベルト
交響曲 第７番 ロ短調 D759〈未完成〉

未完の作品でありながら、作曲者の代表作として人気を博している例はかなり珍しい。通常、交響曲は4つの楽章で構成される。しかし、フランツ・シューベルト（1797〜1828）はこの交響曲を第2楽章までしか完成させなかった。第3楽章の部分的なスケッチは残っているので、少なくとも当初は第4楽章まで書くつもりがあったにちがいない。ところが、なんらかの理由でこの曲は未完のまま放置されることになってしまった。第1楽章と第2楽章のみでおおむね25分ほどの演奏時間を要することを考えれば、それまでのシューベルトの交響曲と比べて、かなり長大な作品として構想されていたことになる。もし完成していたら、はたしてこれほどの人気作になっただろうかと、つい想像せずにはいられない。

もっとも、シューベルトが作品を未完のままにすることは決して珍しくない。番号こそついていないものの未完の交響曲はほかにも残されている。シューベルトの交響曲はそのいずれもが生前に公開演奏されていないことを考えると、むしろ演奏機会のあてもないまま交響曲のような大作を完成するほうが特別なことなのかもしれない。作曲は1822年。翌年、シューベルトはシュタイアーマルクの音楽協会の名誉会員に迎えられた返礼として、未完のままの楽譜を協会に送った。なぜ未完の曲を送ったのかは不明だ。作曲者の死後、1865年になって、ようやく初演が行われた。

第1楽章　アレグロ・モデラート　地の底からわき上がるような低弦の動機で開始され、オーボエとクラリネットがメランコリックな第1主題を奏でる。チェロによる第2主題はのびやか。鬱屈（うっくつ）した情熱をほとばしらせながら、大きなドラマを築く。

第2楽章　アンダンテ・コン・モート　管楽器の柔和な響きに導かれ、弦楽器が清らかな主題を奏でる。平安と苦悩を交替させながら、穏やかな終結部に向かう。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1822年／初演：1865年12月17日、ウィーン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン
交響曲 第５番 ハ短調 作品67〈運命〉

なぜこの曲が「運命」と呼ばれるかといえば、冒頭の「ジャジャジャジャーン！」（運命の動機）について、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770〜1827）が「運命はこのように扉を叩く」と語ったから……と古くから言われてきたのだが、近年この逸話は人気がない。この証言を伝えた作曲者の秘書シンドラーはたびたびウソをついた信用できない人物であり、逸話の信憑（しんぴょう）性は低いとみなされているからだ。もちろん、ウソつきの言うことがすべてウソとは限らないので、本当に運命が扉を叩いている可能性も否定できないのだが。

実は「運命の動機」については別の証言もある。ベートーヴェンの弟子ツェルニー（ピアノ教本で有名だ）によれば、これはキアオジなる鳥の鳴き声に由来するというのだ。キアオジは日本ではなじみの薄い鳥だが、インターネットで動画検索すればすぐに鳴き声がわかる。「チチチチー」というよりは「チチチチチチ、ツィー」といった鳴き声だが、たしかに「運命の動機」によく似ている。野鳥図鑑によればキアオジは「ハンマーで叩くようなリズムで鳴く」。シンドラー説もツェルニー説も「なにかを叩いている」という点では意見が一致している。

第1楽章　アレグロ・コン・ブリオ　「運命の動機」で開始され、緊迫感あふれる楽想が展開される。「運命の動機」は全曲にわたり支配的な役割を果たす。

第2楽章　アンダンテ・コン・モート　通例ではゆっくりとした楽章が置かれる第2楽章だが、作曲者の指示は「コン・モート＝動きをつけて」。変奏曲形式。

第3楽章　アレグロ　スケルツォ楽章。うごくめくような低音に導かれて、ホルンが「運命の動機」に基づく主題を奏でる。切れ目なく第4楽章に続く。

第4楽章　アレグロ　勝利を思わせる主題が高らかに鳴り響き、高揚感をみなぎらせる。苦悩から勝利へと至る超克のドラマが完結する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1807〜08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク
交響曲 第９番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）にとって、アメリカははるか彼方の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るためには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第９番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・モルト　ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　ラルゴ　イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章　アレグロ・コン・フオーコ　あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならでは。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート２（ピッコロ持替）、オーボエ２、イングリッシュ・ホルン、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部

メンデルスゾーン
ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

ドイツ初期ロマン派の作曲家フェリックス・メンデルスゾーン（1809〜47）が、短い生涯における円熟期に完成した代表作。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの諸作と並ぶ人気ヴァイオリン協奏曲である。

メンデルスゾーンは1838年、常任指揮者を務めるライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターで友人のフェルディナント・ダーヴィトのために構想を開始した。しかし創作は難航し、ダーヴィトの助言を仰ぎながら、1844年にようやく完成。翌年3月、ダーヴィトの独奏、病気療養中の作曲者に代わるニルス・ゲーゼの指揮により初演された。

本作の主な特徴は、まずホ短調の調性（前記3人の曲はヴァイオリンがよく響くニ長調）、そして全楽章が切れ目なく演奏される点と、従来は第1楽章の最後に置かれ、内容も奏者任せだったカデンツァが、中間部に移された上、すべて楽譜に記された点にある。雰囲気の継続と一貫した曲調を企図したこれらの発想は、当時のヴァイオリン協奏曲としては革新的だった。

曲は、古典的な均整美と甘美なロマンティシズムが溶け合った名品。優美でありながらも憂いや力強さを併せ持ち、何より旋律の美しさは比類がない。また独奏はほとんど休みなく弾き続け、名人芸的な技巧を随所で披露する。

第1楽章　アレグロ・モルト・アパッシオナート　管弦楽による主題提示部がなく、独奏が2小節目から登場する点も斬新。そこで弾かれる有名な第1主題と、木管が出す穏やかな第2主題を中心に淀みなく展開され、ファゴットの持続音で次楽章へ移る。**第2楽章**　アンダンテ　叙情的な歌が流れゆくハ長調の緩徐（かんじょ）楽章。中間部は短調に変わり、荘重な趣が漂う。**第3楽章**　アレグレット・ノン・トロッポ〜アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ　短い経過部から2つの主題を軸にしたホ長調の主部へ移り、華やかな音楽がテンポよく繰り広げられる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1838〜44年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ／演奏時間：約26分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク
チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）が残したチェロ協奏曲の最高峰。すでに国際的名声を得ていたドヴォルザークは、1892年9月、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバーの要請を受けて渡米し、同音楽院の院長に就任した。そして現地音楽の要素と故郷ボヘミアの民俗色を融合させた、交響曲〈新世界から〉などの傑作を生み出した。しかし望郷の念が募る彼は、1894年11月から95年2月にかけて、同郷のチェロ奏者ヴィーハンから望まれていたこの協奏曲を作曲し、4月に帰国してしまう。本作は手直しを経て1895年6月に完成。翌年ロンドンにて初演された。

曲は、哀愁に満ちた雄大かつ情熱的な音楽。大規模な構成の中に、高まる郷愁を反映したボヘミア的な情感が横溢（おういつ）している。特徴的なのが協奏曲には稀（まれ）なほどシンフォニックな管弦楽。複数の主題をクラリネットが提示し、弦楽器の協奏曲での使用は稀なトロンボーンとチューバが重心の低い響きを作り出すなど、管楽器の活躍も目覚ましい。独奏は存分に技巧的ながら、明確なカデンツァはなく、管弦楽との一体感や音楽の流れが重視されている。

なお、第2楽章中間部の訴えるような主題は、初恋の女性ヨゼフィーナ（妻の姉）が好んだ歌曲〈ひとりにして〉に拠（よ）っており、1895年5月の彼女の死に際して、第3楽章終結部にも同旋律が加えられた。

第1楽章　アレグロ　共に哀切な冒頭の第1主題とホルンが出す第2主題を軸にした壮大な音楽。長大な管弦楽部分に続いて、朗々と歌い且（か）つ装飾的な独奏が縦横に展開される。

第2楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ　ト長調の緩徐楽章。優しい主題が歌われる叙情的な主部に、激しさを湛（たた）えた中間部が挟まれる。

第3楽章　アレグロ・モデラート　民俗色が特に濃い終曲。力強い主要主題に二つの副主題が挟まれ、後半のしっとりした部分では第1、2楽章の主題も回想される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1894〜95年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー
ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）が完成した最初の協奏曲。1874〜75年という比較的初期に書かれた作品ながら、彼の3曲のピアノ協奏曲はもとより、古今の協奏曲の中でも最上位の人気を得ている。

本作は以下の経緯でも知られている。チャイコフスキーが献呈を想定していた恩人で大ピアニストのニコライ・ルビンシテインに曲を聴かせたところ、「無価値で演奏不能」と酷評されてしまう。怒った彼は、問題点の指摘に対して、「一音たりとも変更するつもりはない！」と応酬し、ドイツの巨匠ハンス・フォン・ビューローに楽譜を送付。初演はビューローの演奏旅行先アメリカのボストンで行われ、献呈もビューローになされた。ただしルビンシテインもモスクワ初演を指揮し、後にはソロも演奏するなど曲の価値を認め、一方のチャイコフスキーも2度改訂を施している。

曲は、古典的な協奏曲形式の中に、民俗的色彩と哀愁や叙情性、そして豪壮な力感が盛り込まれたスケールの大きな音楽。ピアノも華麗で技巧的なソロを繰り広げる。

第1楽章　アレグロ・ノン・トロッポ・エ・モルト・マエストーソ〜アレグロ・コン・スピーリト　全曲の半分以上を占める壮大な楽章。変ニ長調の長い序奏部で開始。ホルンが出す主題は印象的だが、意外にも主部には全く登場しない。主部は、ウクライナ民謡に基づくリズミカルな第1主題と哀調を帯びた第2主題を中心に、多彩な展開を遂げる。数回に及ぶカデンツァも大きな聴きどころ。

第2楽章　アンダンティーノ・センプリーチェ　フルートが出す牧歌風の主題を軸にした緩やかな部分に、フランスの小唄を用いたスケルツォ風の急速部分が挟まれる。ここは全体が長調で推移する。

第3楽章　アレグロ・コン・フオーコ　エネルギッシュな終曲。ウクライナ民謡に基づく躍動的な第1主題と、流麗な第2主題が対比されながら烈（はげ）しく進む。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1874〜75年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

グリンカ
歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲

ロシアの作曲家ミハイル・グリンカ（1804〜57）の歌劇〈ルスランとリュドミラ〉は、〈皇帝に捧げた命〉（1836年初演）に続いて完成させた、彼にとって2作目となるオペラである。台本は、文豪アレクサンドル・プーシキン（1799〜1837）の同名の長編物語詩をもとに、シルコフによって作られた。1836年に作曲が開始され、長い中断をはさみ、1842年に完成（全5幕）。同年3月に総譜が帝室劇場に提出され、12月9日に初演された。

物語の舞台は、古代ロシアのキエフ公国。大公の娘リュドミラは、悪魔にさらわれ、その救出に3人の騎士が向かい、様々な困難を乗り越え、救出に成功したルスランと結ばれる、というもの。それに加え、求婚者である3人の騎士たちの恋をめぐるエピソードや、善良な魔法使いと邪悪な魔法使いが登場するなど、登場人物が多く、筋立ては入り組んでいる。前作「皇帝に捧げた命」は、愛国的な英雄の悲劇といった分かりやすい展開だったが、本作は複雑であることが理由のひとつとなって、初演以後、上演される機会は次第に減っていった。しかし、1860年代以降、グリンカの作品への再評価が進むと、オペラにも光が当てられ、軽快で親しみやすい〈ルスランとリュドミラ〉序曲は、グリンカの作品のなかで最も有名な曲となった。

オペラの幕開けに演奏される序曲は、颯爽とした導入に続き、主部でまず力強い第1主題が示される。これは、ルスランとリュドミラの婚礼の場面（第5幕）の音楽。ヴィオラとチェロなどによる落ち着いた第2主題は、ルスランのアリア（第2幕）に基づく。この2つの主題を中心に勢いよく、オーケストラはそのまま結びまで駆け抜ける。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1842年（序曲）、1836〜42年（歌劇）／初演：1842年12月9日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約5分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ラフマニノフ
ピアノ協奏曲 第２番 ハ短調 作品18

セルゲイ・ラフマニノフ（1873〜1943）は、1892年にモスクワ音楽院作曲科を首席で卒業した。翌年には卒業作品の歌劇〈アレコ〉がボリショイ劇場で初演され、若くして音楽界で知られる存在となった。順風満帆な作曲家人生を歩み始めたように見えたが、自信をもって発表した1897年の交響曲第1番の初演は失敗に終わる。「地獄の音楽」と酷評されるなど大きな挫折を味わい、それからしばらく、小品はいくつか手がけたものの、創作活動から離れていた。

1900年、精神科医ダーリ博士による暗示療法は功を奏した。自信を取り戻したラフマニノフは、再び創作への意欲が高まり、ピアノ協奏曲第２番に着手する。先に第2、第３楽章を書き上げ、翌年に第1楽章が完成した。独奏ピアノを自ら受け持った初演は大成功を収め、作曲家としての名声を確立させた。

第1楽章　モデラート、ハ短調　管弦楽による導入はなく、鐘の音を模した独奏ピアノの力強い和音の反復で開始する。ラフマニノフが育ったノヴゴロドは、町中に響き渡る教会の鐘の音が有名なところで、徐々に響きを増していく冒頭は印象的である。続いてダイナミックな第1主題が管弦楽で力強く主張し、哀愁を帯びたロマンティックな第２主題は、独奏ピアノで奏される。どちらの主題もロシアの情景を思わせ、民族的な精神を感じさせる。

第２楽章　アダージョ・ソステヌート、ホ長調　独奏ピアノと木管楽器で対話が繰り返される。ラフマニノフの抒情性がよく現れ、寄せては引く波のように夢想的な音楽が静かに広がる。

第３楽章　アレグロ・スケルツァンド、ハ短調〜ハ長調　リズミカルな導入部に続いて、炎のような第1主題とたっぷりと歌われる第２主題が示される。最後は、第２主題に基づく壮大な音楽が繰り広げられ、決然と結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1900〜1901年／初演：1901年10月27日、モスクワ／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

ムソルグスキー（ラヴェル編）
組曲〈展覧会の絵〉

ロシア国民楽派「五人組」のひとりモデスト・ムソルグスキー（1839〜81）は、ロシア民謡由来の音階や和声を巧みに用い、その秀でた描写力と風刺の才能で数々の作品を手がけた。ピアノ組曲〈展覧会の絵〉は、急逝した友人の画家で建築家のヴィクトル・ハルトマン（1834〜73）の回顧展で得た印象をもとに書かれた。

しかし作品は、作曲家の生前に演奏されることはなく、1886年にリムスキー＝コルサコフの校訂で楽譜が出版された。有名なモーリス・ラヴェル（1875〜1937）による編曲版は、1922年に指揮者クーセヴィツキーの依頼で作られた。ラヴェルは、原曲の第6曲と第7曲の間のプロムナードを削除するなど若干の手を加えているが、原曲の粗野な味わいを残しながら、「管弦楽の魔術師」と言われたラヴェルらしい洗練された音楽に仕上げた。

プロムナード：ロシア的な五音音階の主題がトランペット独奏で奏される。**第1曲「グノームス」**タイトルはラテン語。こびとの不気味な姿が描かれる。**プロムナード**：主題はホルンに現れる。**第2曲「古城」**ファゴットに導かれ、サクソフォンが哀しげな旋律を歌う。**プロムナード**：トランペットが重々しく響かせる。**第3曲「テュイルリー」**フランスの庭園で子供たちが遊んでいる様子。**第4曲「ビドロ」**ポーランドの牛車。チューバ独奏で進む。**プロムナード**：寂しげな木管の響き。**第5曲「殻をつけた雛鳥（ひなどり）のバレエ」**ユーモラスな木管主体のスケルツォ。**第6曲「サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」**二人のユダヤ人の会話。威圧的な態度と卑屈な性格を対比させる。**第7曲「リモージュ」**フランスの市場の喧騒（けんそう）。**第8曲「カタコンブ」**古代ローマの地下墓地。金管の和音が不気味に響く。続く**「死せる言葉による死者への呼びかけ」**はプロムナードの変奏。**第9曲「鶏の足の上の小屋」**伝説の妖婆バーバ・ヤガーのグロテスクな音楽。**第10曲「キエフ（キーウ）の大門」**オーケストラ全体が巨大な鐘のように鳴り響く。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1874年、編曲：1922年／初演（ラヴェル編曲版）：1922年10月19日、パリ／演奏時間：約35分
楽器編成／フルート３（ピッコロ持替）、オーボエ３（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット２、バスクラリネット、ファゴット２、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、チューバ、バリトン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、シロフォン、ラチェット、鞭、銅鑼、チャイム）、ハープ２、チェレスタ、弦五部